

■ 研究ノート ■

引揚者をめぐる排除と包摂 －戦後日本における「もう一つの『他者』問題」－

藤井和子

(関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程)

はじめに

これまで社会的排除に関しては、ジェンダー、障がい者、外国人、被差別部落などをはじめ、さまざまな角度から論じられてきた。一方、第2次世界大戦の日本の敗戦によって外地から引揚げた日本人も「ヒキアゲシャ」と蔑まれ、地域社会から排除のまなざしを向けられてきたが、これまで引揚者¹⁾に関する排除については特に論じられて来なかった。

外地で暮らし生活の基盤を築いていた日本人たちが、日本の敗戦後、住み慣れた土地を後に、日本本国に引揚げた。命がけともいうべき引揚げの果てに彼らが見たのは、焦土と化した本土の姿だった。彼らは、戦争が始まる前から海外に移住し、新天地で懸命な努力を重ね必死で築いた事業も、土地家屋、家財道具などの財産も、GHQの指令により一切を放棄して引揚げるしかなかった。引揚げ時において、特に女性は身の危険と隣りあわせであったし、家族や友人を失った人も多かった。語りつくせぬ苦労の果てに、引揚者には容赦ない排除が待っていた。これまでの引揚者研究は引揚げ前の生活や、引揚げ体験が中心であったが、引揚げ後の生活についての研究は始まったばかりである²⁾。

本稿は、2012年に実施したフィールド調査で蒐集した、朝鮮全羅北道群山郊外の開拓村「不二農村」から、長崎県壱岐に引揚げ後、戦後開拓として入植した男性のライフヒストリーの聞き取りと引揚者たちがまとめたテキストである『開拓50年の歩み』に基づく。戦後、異質な「他者」として排除のまなざしを向けられた引揚者が、その後、引揚者として地域社会へと包摂されていく過程におけるアイデンティティのあり方やその葛藤に着目し、戦後の日本における「もうひとつの『他者』問題」について検討するものである。また引揚者は、みずからの引揚げをめぐる経験や記憶を、子供や孫の世代に語ることはないということである。この点に関しては、本稿では「沈黙の壁」という視座から、地域社会や次世代の人々には語られることのない引揚者たちの経験や記憶をめぐる葛藤への理解を掘り下げることをめざす。

1) 引揚者とは、1945年8月15日の日本敗戦によって、それまで居住していた「外地」(台湾、朝鮮、満州、関東州、サハリン(南樺太)、千島列島、南洋諸島等をさす戦前の用語)から日本本国(戦前までは「内地」と呼ばれていた)へ帰還した人々(民間人、および軍人・軍属)をさすものとする(島村2013)。軍人軍属以外の民間人引揚者は約300万人といわれている。

2) 『引揚者の戦後』(島村編2013)が刊行され、引揚げ後の生活についての本格的な研究がはじまった。

ここでライフヒストリーを取り上げるのは長崎県壱岐市在住、江川漣氏（1937年生まれ 写真1）である。2012年、筆者は壱岐（写真2）で漣氏から聞き取りを行った。



写真1 江川漣氏と筆者（2012年）



写真2 壱岐（2012年筆者撮影）

1 壱岐から朝鮮へ

朝鮮、全羅北道群山は、1899年群山港開港後、港や鉄道が整備され日本人によって近代都市が築かれ、湖南平野で生産された米を大阪に移出することによって栄えていった。その米の生産を群山近郊で担ったのが、日本人による農場経営（労働力は朝鮮人）と後に行われた満蒙開拓の基礎ともなった不二興行干拓地の開拓村「不二農村」（労働力は日本人入植者）であった。不二農村とは水利王といわれた藤井貫太郎の経営による初の日本人農民の集団移住によって築かれた開拓村である（轟 2005）。

1937年、不二農村に江川清夫妻の長男、漣氏は誕生する。以下は、江川清氏夫妻がどのように朝鮮に渡ったのかについて、漣氏からの聞き取りを筆者がまとめたものである。

江川清氏は1904年、長崎県壱岐の勝本の農家の三男として生まれた。当時は、長男が跡継ぎとして家に残り、弟たちは自分で仕事を求め出て行くしかなかった。二男が王子製紙に勤めるおじを頼って先に小倉に出ていたので、清氏もそれにない小倉の王子製紙に勤めることになった。数年後、壱岐で農業をする子供のいない叔父が、「壱岐に帰って来て、農家の跡を継げ」というので清氏は妻と壱岐に帰った。しかし双方の関係は、うまくはいかなかった。叔父とはいふものの10歳ほどしか年の差はなく、清氏には農業経験もないうえ、「ご飯を食べては本を読む」という農民的でない生活スタイルが、叔父には受け入れられず、また嫁同士も年が近く、とかく折り合いが悪かった。清氏は「それなら軍隊に入ったつもりで朝鮮を見に行こうか」と1930年に、全羅北道群山郊外の開拓村「不二農村」に入植することにしたのである。当時壱岐の農民は自分の田が3反しかない者も多く、5反あれば「食える」といわれ、1町歩もっていれば大地主だったが、そんな農民はまずいなかった。それが朝鮮に渡れば、不二農村では3町歩が手に入ったのである。

不二農村は、1924年から各県で10戸選抜され知事の許可を得た夫婦が入植し、一村ごとに出身の県名がつけられ、まとまっていた。希望者の多い長崎村は先発隊で10戸がうまっており、隣の



地図 1 彦岐と群山



地図 2 不二農村全図（武田恒氏の著書より抜粋）

奈良村にまだ空地があったため江川家は1930年に補欠入植した。長崎村は長崎県からの入植者で構成されていたが、壱岐からの入植者はいなかった。

2 不二農村での生活

江川家には長女が1931年に生まれ、次女に続き、1937年、長男の漣氏が誕生した。漣氏の朝鮮半島での記憶は、引揚げ時の小学校3年生までである。しかし、漣氏は朝鮮での生活を鮮明に記憶している。不二農村はもとは海で、干拓した土地であったため、開拓初期のころは期待通りには収穫できず、塩害との戦いが続いていた。

しかし漣氏が生まれたころには除塩技術が進み、収穫が増大し生活は豊かになっていた。米、野菜、果物、鶏卵を自給自足し、近くの朝鮮人の漁師が魚介類を売りに来ると買って食べていた。

不二農村には、農村の子供たちが行く不二小学校が組合によって建てられた（武田1998）。漣氏の担任は花岡という女性であった。クラスには朝鮮人の児童は一人であったが、林君と日本名で呼ばれていた。ある日の学級会で以下のような、林君を差別する事件がおこった。

クラスの子「林君は家で朝鮮語を話します」

先生「林君はなぜ家で朝鮮語を使うのですか」

林「おばあちゃんが日本語がわからんからです」

漣氏はこの件について、「林君は頭も良かったし、生活レベルの高い家の子だった。そのとき彼は泣かなかった。当時、朝鮮のことを三等国と言っていたり、名前やことばをうばってきた。林君に会って謝りたいが、（本当の）姓も名もわからん…」と述べたが、他の思い出をめぐる語りとくらべても、より感情がこもっているようだった。

漣氏はこの記憶の断片を筆者の行った不二農村時代のインタビューの冒頭で、是非伝えておきたいこととして自ら語った。数ヶ月後このことに関してあらためて漣氏に「自分自身が引揚げ後にいじめられたから、朝鮮の林君のことを思い出したのですか」と質問した。漣氏は力強く質問を次のように否定した。

（朝鮮では朝鮮の人たちの）土地を奪い、名前を奪い、言葉を奪い、人としてやってはいけないことをやったと思います。自分が（壱岐で）いじめられたのと次元が違います。日本は大いに反省は、せないかとです。しかし韓国の人には、いつまでもそれを引きずってほしくないんです。壱岐も元寇の役で今のモンゴルから壊滅的な目にあわされました。しかし我々も、モンゴルの相撲で来日している力士に拍手をおくっています。ただ、恨みだけが残っても、なんにもならないですよ。気持ちが前向きであってもらわんと。日本は反省して、それを韓国は受け入れんといかんとですよ。それを乗り越えて隣国だから仲ようせんといかんのです。侵略はやってもらわれてもいかんのです。やられた側の惨めさをいやというほど見てきたですよ。

漣氏と姉たちとの間でも、朝鮮人への差別に関しては意見が違っているという。9歳で目の当たりにした林君をめぐる差別の理由は、家で彼が朝鮮語を使っていたということである。一クラスメートへの差別は、差別をしようと思っていない漣氏も含めクラスメート全員によって学級会という場で行われ、さらには担任の教師も加わったことが、漣氏の心に一生の影を落としている。

林君が差別された原因は、家で朝鮮語を使っていたということだ。しかし、教室では日本語を使っており、林君は勉強もでき裕福な家で育っていたという。漣氏は当時、自分自身が差別をしなくても、差別をしている当事者であるという意識は希薄で、差別について深く考えたこともなく、いつものように学校に行くと不意に差別問題の当事者になってしまった。突如、差別問題の当事者となって逃れられなかった9歳の衝撃の体験が、65年たっても鮮明にふるさとの記憶として真っ先に語られていることから、漣氏の中で決して消えない記憶であることは間違いない。

3 壱岐への引揚げ

1945年8月、日本は敗戦国となりGHQからの帰国命令が出ても、なかなか不二農村の住人は田畑や農作物をおいて日本に引揚げようとは思えなかった。不二農村の理事長は「帰る伝があればすぐ帰れ、売れるものは売れ」と教えたが、従う者ばかりではなく反発する者もいた。

不二農村には、周辺の朝鮮人が次々と農具を買いに来た。そのうち「どうせ日本人は農具でも何でも置いて帰るしかない」と朝鮮人に足元をみられるようになっていった。

9月のある日、再召集されていた父親が、その翌日に兵隊たちは日本に帰ると知らされたので、一家で兵隊に同行し日本に帰ったほうが安全だと考え、その翌日に帰るという選択をした。清氏は、自分ひとりで40を超えた妻と子供4人を連れて帰るのは大変だから引揚げの準備や心積もりをしていなくとも、翌日に兵隊に同行し引揚げよう判断したのであった。今までの苦労がやっと実る収穫を前にし、日本に帰っても住むところも食べるものもないのだから、秋の収穫までは帰らないという村民が多い中で、江川家は一足早く9月中旬に引揚げを決意したのであった。

不二農村の住人はいわば日本人の移民である。しかし、植民地支配下における日本の領土だから移民という意識もなかったし、将来、日本（内地）に帰る気はまったくなかった。海を埋めたてた塩害の強い土地を必死に改良し、井戸を掘り、治水工事をして美田をこの地に残していったという自負心が今も残る。10月、引揚げ船に乗った時に漣氏は9歳で、二人の姉とは違って朝鮮、羅州の叔父の家にすら行った事がなかったというから、不二農村を出たことはなく、もちろん日本に行くのは生まれて初めてのことだった。江川夫妻はともに壱岐の出身なので一家は壱岐へと戻った。

4 再入植と排除

^{はこぎえすみ} 筥崎江角という沿岸の村に引揚げ後、漣氏の父親は「親元だから家もあるしこのままここにしよう」と思っていたが、母親が「(自分の土地でもないし)ここはいつまでもいるところじゃない」と感じて積極的に開拓村への入植を望んだ。この開拓村には漣氏の父の母方の叔父で、朝鮮、羅州でお菓子屋をしていた永元秀年氏の一家が先に入植していた。永元氏は引揚げ後、勝本港近くの無

人島、^{ながらす}名鳥島の兵舎あとに住み、あわびなどの海産物をとって食べていた。兵舎あとには行くあてのない人が住み着いていたので、その人々を対象として開拓の募集などが通達された。

戦時中に兵隊が食糧として芋などを作るため買い上げていた農林省の所有の土地などに開拓が許されたが、開拓地に入ってみると、内陸の隔離されたような手付かずの山林のままの状態であった。松や椎の木におおわれた山で、その原野を13戸の入植者が、重機もなく、ツルハシや鎌などを使った手作業で開墾するほかなかった。山の木を切り、木の株を鋤一本で掘り起こした。一戸あたり一町歩の開墾が義務付けられ、そこに定住することが行政側から指導された。この13戸の内訳は復員してきた地元農家の土地を持たない次三男坊、朝鮮半島（群山、木甫、羅州など3件）および満州からの引揚者であった。

昭和22年から、およそ7年間壱岐支庁職員として開拓行政を担当した元壱岐支庁農林水産部長、長嶋誠氏によれば、壱岐の戦後開拓は、国の緊急開拓事業計画に基づき、食糧の生産を中心とした生活基盤を確保するために、集団入植者として山林、原野を開墾することが始められたという。当時、郡内の開拓地で主なものは、旧軍用地の払い下げによる沼津黒崎、初山と、この那賀の民有地の一団地であり、後者は、山林・原野の一団地が開拓地として認定されたものだった。那賀の開拓は、国が団地内の総ての土地を買収し、土地の配分計画に基づいて入植者に売り渡しを行い、開拓農家として育成するもので、すべての開拓者がゼロからはじめる大変な事業であった。入植者は、不安と希望の中で、国、県の援助を期待しながら、開墾、営農、生活、更には補助金申請をはじめ、開拓農協の設立手続きなど、膨大な法的事務を処理しながら日夜業務に精進していた。この当時の組合長は、永元氏（漣氏の父の母方の叔父）であった（長嶋2000）。

開拓は、簡単なものではなかったのは事実であるが、一方で国の緊急開拓事業計画に基づくものであり、国や県の補助があったからやっていけたのである。しかし入植当時の苦労は、今では想像もできないような過酷なものであった。次に入植者一世である、故永田政光氏の妻喜代子氏による「回想」（『開拓50年のあゆみ』）をもとに開拓者の側からみた開拓村と、入植当時の生活を振り返ることにする。

那賀開拓地は、昭和22年2月11日、紀元節の日に入植者の鋤入れ式が現在の小谷の辻で行われた。その跡に粗末な藁ぶき小屋が建てられ、事務所兼合宿所となり、20代から60代の数名が共同生活と共同開墾を始めた。そこには井戸がなく河川の水を飲料水とし、今では考えられない原始に近い生活であった。朝早くから、夕方遅くまで、岩切りと開墾作業を続け、雨の日は未墾地の下切りをし、近隣農家から声がかかれば労賃稼ぎに手伝いに行き、開墾が遅れば月明かりの下で作業をした。1坪5円の開墾費用の労賃が生活の糧となった。しかし開拓者は不平不満も言わず、育ち行く子供の為に辛抱した。

やがて開墾が進むと作付け作業や食糧の確保に忙しい毎日であった。酸性の強い畑には、芋や粟、馬鈴薯が主な作物であり、芋もピンポン玉位のものしかできず、芋の入った粟御飯が常食、子供のおやつは何時も芋で、ただ生きることをのみを考えた生活であった。子供が小学校へ入学すると、学芸会と運動会には粗末ながらも弁当を持って行き、子供と楽しい1日を送ったが、その他には外に出ることはなかった（永田2000）。

開拓者の生活は、一時も休む暇もなくひたすら開墾し、家も共同の小屋しかなく、電気や水道、

ガスもないところからのスタートで、あらゆることを我慢して生活に余裕がなかったことが窺える。漣氏も「行政の指導や補助があったから何とかやって来れた」と過酷な開拓時の生活を語り、さまざまな補助がなければ、到底生活は成り立たなかったと言うくらい心底苦しかったと振り返る。開拓初期の開拓者と既存の地域住民との生活には、大きな格差があり、行政の補助に頼りながら開墾している貧困な集団が蔑視されるのは想像に難くない。



写真 3 国分開拓村 初期の小屋（2012 年筆者撮影）

漣氏によると「背戸の邸に前畑」ということわざが壱岐にはあるそうだ。これは、壱岐では冬には北風が強く、北側が山、南側が畑というところに家を建てるのが良いという知恵を伝えるものであるという。はじめは開拓小屋 1 軒からはじまり、そういう場所を選んで、14～5 軒が家を建てようとしたが、現在のように重機があるわけでもなく、大変な作業だったので結局 13 戸が家を建てるにとどまった。「国分開拓村」の誕生である。

この頃、既存の島民のなかには開拓村の人々を差別する風潮があった。漣氏は昭和 20 年代の開拓当時から、壱岐の島民が開拓者を蔑視していたと次のように語った。

当時は島内だけの流通では野菜は売れず、米しか金にならず生活は苦しかった。学校に通うころは生活レベルが低いことでいじめられた。生活が貧しく（元からの島民が）「あすこんもん」というとですよ（あそこのものと言うんです）。「かいたくもん、かいたくもん」と言われ、「どこにもんがあるか」と言い返したとです。

引揚者の中でも若い世代は、地元特有の方言、ふるまい、生活習慣、考え方などを身につけていないこともあり、周囲からは異質な他者として排除のまなざしが向けられることが強かった。「今のように陰湿ないじめではなかったが、かなり激しいものだった」と漣氏は語る。開拓者の初期の生活は、余裕がなくただ生きることを考えた生活であったのだから、差別の主な要因は貧困である。学校では島で生まれ育った者から「あすこんもん」「かいたくもん」と見下され、自分たちよりも生活水準の劣った者と格差づけられ、からかわれたのである。しかし、漣氏は「どこにもんがあるか」と言い返し、差別に屈して終わらなかった。親の世代は忙しく働きづめで、親の苦勞を目の当たりにしている漣氏は差別されても逃げ場も帰るところも自分たちにはないという覚悟を持って壱岐でとけこもうとしていた。差別は、子供たちの間だけではなかった。突然やってきて、今まで山であった何もなかったところを切り拓き、原始的な生活を始めた開拓者の貧しい暮らしを見て、交流のない既存の地域住民が、こういった生活をする集団を「あすこんもん」と蔑視するのは想像に難くない。気の遠くなるような手作業の開拓や、一向に収穫があがらない畑を見て、「そんなこ

とできるわけがない」と島の人々が笑っていたことも漣氏は語っていた。

5 排除から包摂へ

卒業後、漣氏は農閑期には大工として、「名古屋方面」に出稼ぎに行った。昭和30年代からオリンピック景気もあって内装大工（自信があったのはさしものづくり）として重宝された。その技術は農業の合間に自分で道具の手入れや加工をするなかで身についたもので、近所の人たちと一緒に行った。

一方で、行政からの指導や援助、補助が開拓者の生活を向上させ、貧困や差別からの脱却の足がかりができていった。元壱岐支庁農政係長、岡部義朗氏の「祝辞」（『開拓50年のあゆみ』）によると、多様な補助が入植当初から10年以上も続けられたことがわかる。以下は「那賀民有地区の開拓によせて」という項目を筆者がまとめたものである。

昭和22年に買収決定をし、土地利用計画が樹立され、これに基づき、選衡された入植者は、掘っ立て小屋を作り住家確保をなし、急務である道作りや開墾等も国の開墾補助金や融資金等から僅かな日当を貰い、共同作業により2年余で目標面積の開墾達成後、昭和25年には、土地の配分を受けた。同時に食糧生産をしなければならないので、芋・麦等を植えたが、木もよく育たなかったほどの痩せ地で農作物が出来ず、土壌調査の結果、強酸性土壌で作物が出来ないのも当然の事であった。国の補助政策で土壌改良資材（炭酸カルシウムなど）の交付を受け、酸性土壌の矯正は出来たものの、有機物の補給が出来ず化学肥料のみによる収奪的農業をしたため、後年にその付けを受け苦労することになった。国の政策とも相俟って、補助事業により、階段畑工事を実施し、山成畑の解消と農作業の効率を図って来た。一方で家庭生活の利便をねらいとし、電気導入事業や、国の補助事業による、深井戸工事等を実施して農家形態を確立し、入植者としての地位を高めて来た（岡部2000）。

こうした行政の保護と開拓者のたゆまぬ努力によって、開拓者の生活水準は向上した。加えて、昭和30年代の高度成長期に入ると日本の全農家は、耕起作業の機械化が進み農業形態が機械化変革を迫られることになる。つまり開拓者と既存の一般農家が同列化したのである。開拓者も食べることに精一杯だった時代から、公民館（写真4）の独立建設に至り、公民館単位の集団の団結力が大きな力を発揮する。また岡部氏の「祝辞」（『開拓50年のあゆみ』）では入植者と一般農家との格差が解消されていった様子を以下のように述べている。

昭和40年代になれば入植者として一層の団結を高めるため、公民館建設等目覚ましい発展を遂げたが、日本経済の発展と共に農業形態も容赦なく変革を迫られ、当地区に於いても農業構造改善事業の活用により一般農家との合流、あるいは野菜ハウスの導入により集約農業を行うことによって農業経営の安定を図ることにした。また農家の充実を図り乍ら、地域社会においても素晴らしい活躍により、地域社会の発展に貢献している（岡部2000）。

そしてビニールハウスの導入という新しい取り組みが、開拓者への周囲のまなざしは、排除をもなった差別的なものから、地域社会の一員として包摂するものへと転換するきっかけとなった。

芦辺町役場税務課長であった西村善明氏は「温故知新」（『開拓50年のあゆみ』）で以下のように



写真 4 旧国分開拓公民館（2012 年筆者撮影）



写真 5 国分開拓村（2012 年筆者撮影）

述べている。彼の記述からは、開拓者が地域社会で露骨に差別される様子がほとんど窺えないどころか、島民を率いる存在として、注目されている様子がわかる。

昭和 55 年国分開拓に新しい壱岐農業が芽を出した。芦辺町の県営畑地帯総合土地対策事業の導入に伴って、島内自給用野菜供給施設として、ハウスが導入されたのだ。今でこそ、島内いたるところにハウスが建つようになったが、当時の壱岐では「ハウスは風が強くて無理だ」と考えられていた。当時、壱岐農業改良普及所、野菜専門の普及員の「同じ島内でできてここにできないはずがない」の一言で、心を動かされ取り組んだ。毎日が非常に心配だったが、島内の注目の一つとなった。又、島の中央部であるということ、更に近くに湯の本温泉があることで各部会等の人々が開拓のハウスを見ては湯の本において反省会、忘年会等がよく開催されていた。風が吹けば、雪が降れば、大雨であれば開拓へと町内の技術者はよく開拓へ集まった。地域、農協、町一体となって取り組み、豊作を喜べる農業に出会った。開拓の 2 分の 1 世紀で培われた「開拓農業魂」をもって 21 世紀に向け「更に新たな挑戦」を続けていくことを期待する（西村 2000）。

漣氏によると、ビニールハウスの導入という新しい取り組みに対して積極的であったのは、地元民ではなく開拓者のほうであったという。開拓を始め、その地に最後まで残り、家を建てた人びとが他の地域社会の住民より結束が強かったのは言うまでもない。島内の他の開拓地である黒崎開拓地など 3 つの開拓地³⁾が集まって開拓者大会をひらくようになり、農業の効率を高める新しい方法を紹介しあったり、開拓者は常に結束し向上心が強かった。それが新しい農業への取り組みと、生産力向上化へのフロンティア精神につながって、地元壱岐の農業を牽引するまでに成長していく。

島では風も強いし、ビニールハウスのような新しいことに手を広げようとする者はいなかった。しかし、島の北部ではすでに取り入れられていた、ビニールハウスの野菜作りを見学して勉強し、開拓者は生き残りをかけてビニールハウス導入を提案した。「米でなければ金にはならなかった」という当時の島の農業の常識の前で、米作に適した広く平坦な土地を持ってない開拓者には、新しい活路を見出すより他に生き残りの道はなかったのである。変化や失敗を恐れ反対していた地元の農民も、ついには開拓者の意見に追従することとなった。

3) 漣氏によると、他に沼津黒崎開拓、初山開拓があったが、水が不足したり農業が続かなかったりしたので解散となり、国分開拓村だけが現在に残っている。

また、開拓村の女性たちが既存の島民たちに包摂されていく過程を、入植者一世である故永田道光氏の妻喜代子氏は「回想」(『開拓 50 年のあゆみ』)という項目で次のように述べている。

(略) 人並みとは言えないまでも生活が少しずつ安定しかけて来た頃、婦人部に嬉しい便りがありました。それは地区婦人会に入会のすすめでした。私達も何とか世間並みの気分になった気がしました。婦人会の入会に続いて生活改善グループの発足となり、社会勉強の機会が訪れ主婦らしい生活が出来る様になりました。

今考えてみても遠い思い出の中に、人生、社会の苦しさで生きる尊さを味わって来ました。

入植当時の面影は今は無く、豊かとは言えないまでも安定した生活が出来る様になったこの頃ではないでしょうか。(略)

『開拓 50 年のあゆみ』に掲載された「写真で見る 50 年の歩み」の「婦人部」の最初の写真は浴衣姿の 8 名の女性が舞台上で踊る姿のものであるが、「昭和 42 年 (1967 年) 4 月、初めて地区婦人会入会頭初にアトラクションとして総会の折に全員で民謡を披露、開拓婦人会として仲間入りした」というキャプションの記述には、彼女たちが地域社会に開拓婦人会として仲間入りした安堵感と自信にあふれていることが窺える。

昭和 41 年 (1966 年) に (旧) 公民館 (写真 4) が建設され、そのころから「地区婦人会に入会のすすめ」があり、「私達も何とか世間並みの気分になった気がしました」というのは、地域社会のメンバーとなったことが実感された瞬間の感想であろう。彼女たちが婦人会の名称に「開拓」と



写真 6 那賀地区ソフトボール大会初優勝 於那賀中学校グラウンド
平成 3 年 (1991 年)『開拓 50 年のあゆみ』より

つけたところに注目したい。既存の島民たちに差別されてから同じ島民としての意識が形成されるまでに、約 20 年という歳月がかかったことになる。

また、地域対抗のスポーツ大会での開拓者の活躍が、周囲に開拓者の存在を印象付けた。開拓から 40 年になるころ、公民館の敷地に運動場を造成（1985 年）し、ソフトボールの大会に向けて練習したユニフォームには「開拓」とチーム名を入れた（写真 6）。那賀地区ソフトボール大会初優勝（1991 年）から地域に「開拓」として認められるようになった。

以上のように、婦人会もソフトボールのチームも「開拓」を自分たちの呼称としたのである。開拓の初期に「かいたくもん」と差別されたが、開拓地がやせた土地ではなくなり一般農家と肩を並べるようになり、「開拓」を自らの呼称とすることに開拓者としての誇りや意地が表れている。開拓 50 周年記念碑建設委員会委員長、大坂鉄雄氏は開拓民が地域社会における安定した地位を築いていく過程を「ご挨拶」（『開拓 50 年のあゆみ』）にて次のように述べている。

（略）井戸掘り、急傾斜地を均らす階段工事と総て手作業で行い、電気導入の暁にはやっと人並みに成れたと皆して祝盃を上げたものです。全員が集り語り合える場所をと 12 畳敷の小さな公民館が出来た 1 戸 1 畳出して余った 1 畳分は酒にして喜んで騒いだのも懐かしい思い出あります。

構造改善事業、水道導入、開拓線道路改良事業、ビニールハウス導入と時の流れと共に新しい事業に着手し近代化してきたものであります。この礎を築いた入植者一世も、多くが今はなく 13 戸が 12 戸には、成りましたが、全戸総てが二世・三世が引き継ぎ守られて居ります。那賀開拓組合が国分開拓公民館と名称は変わり、生活の形態も多少は変わっても、開拓精神の和を以って公民館対抗ソフトボール大会に於いては那賀地区大会 9 勝 7 連覇、芦辺町大会に於いても 4 勝と小さくともきらきら光る国分開拓公民館に成って来た事を誇りに思っています。これからも老若男女一丸と成ってフロンティアとして邁進する覚悟でございます。（国分開拓記念碑建設委員会 2000）

大坂氏の記述から窺えるのは、開拓者たちが、公民館単位で強く団結していることである。1994 年に新公民館が建設されたときにも、「開拓」の名を残そうと漣氏は強く主張したという。婦人会もソフトボールのチームも、「かいたくもん」と差別されてきたにもかかわらず、「開拓」を隠すことなく自分たちの呼称とした。記述にある「誇り」や「覚悟」にも単に地域社会の一員として包摂されればそれで良しでは決してないという、彼らのアイデンティティのあり方が窺える。

筆者が壱岐を訪れたのは 2012 年である。開拓 50 周年記念碑（写真 7）の前で、年は開拓 60 年にあたるので、開拓 60 年にはどんな事をしたのか、開拓 70 年にはどのような計画



写真 7 開拓 50 周年記念碑
（2012 年筆者撮影）

があるのかを漣氏に尋ねた。漣氏からは「(開拓60年目の2007年には)まったく何もしなかったし、もう今後もしないだろう」という答えが返ってきた。

漣氏の子息は農業高校を卒業後、後継者としてメロンのハウス栽培などをしているというが、差別されたり貧しさで苦労したりした経験もない。新しい世代の住人たちは、先人の開拓についてこだわりもなく、「開拓ってなんね?」という感じで、開拓60年を祝うような行事を誰も取り立てて計画することはなかった。開拓者の努力と忍耐の結果、自分たちの農業で十分に生計をたてていけるようになった後に生まれてきた世代には、学校で「かいたくもん」と差別されることもなく、開拓当初の苦労した生活は想像もつかないものであり、開拓に思いをはせることもないのである。

ところで、このような新しい世代に対して、第一世代である漣氏の土地へのこだわりや引揚げという歴史的な出自が継承されることなく包摂されることへの違和感のようなものを理解するため、彼の人生をここで振り返ってみる。豊かだった朝鮮不二農村での開拓時代から、小学校3年生で両親のふるさと壱岐に引揚げ、再入植し農地にもなっていない土地を開拓するというゼロからの出発、姉たちは嫁ぎ壱岐を離れたが、自分が跡を継ぎ、息子に受け継がせる。開拓者の子供として朝鮮で生まれ、敗戦によって引揚げて再入植し、自分がまた開拓を引き継ぎ、苦労はあったが精一杯考え働いてきた。その開拓地が初期の13戸で現在も保たれているということ、日々実感しているわけではないだろうが、先祖代々という土地へのこだわりではない自ら切り拓いた「開拓地」へのこだわりをもち続けているのである。ただし、漣氏にとって、広大で豊かだった朝鮮不二農村での3町歩の開拓地が原点であり、それを再興するのだという想いが常にあり、今年また不二農村ふさと訪問団⁴⁾として韓国全羅北道群山市を訪ねた。漣氏は訪問後の感想を次のように語った。

土地は人が住んでいて初めて意味があるとです。韓国の人でも良かですけん、住んどってくれたから安心したとですよ。

彼は、『開拓年のあゆみ』の「あとがき」で開拓者一世としての自分のアイデンティティを次のように述べている。

昭和22年2月11日紀元節(建国記念日)の日に鋤入れを行った那賀開拓も50年を過ぎました。朝鮮、満州からの引揚者、溢れた農家の次男、三男の寄せ集め所帯で始まった開拓は異文化の集合体でもありました。

先ずは己の食糧の確保からと、そこには山との闘い土との闘いの先輩達の姿がありました。

時の流れ、時代の変革と共に移り行く農業の姿がありました。そうした中でも農魂に燃えた入植一世の志を二世三世が引き継ぎ守り、発展させている姿があることに安堵と歓びがあります。

4) 不二小学校在学中に引揚げ、卒業できなかった人びとが集まって、不二農村や不二小学校を訪問するツアーが、1999年35名の参加者ではじまり、およそ5年に一度企画された。群山大学校に勤務していた筆者が通訳兼現地案内役として2013年の訪問時に同行した。現群山市長は不二小学校の卒業生でもあり、ツアー一行は、群山市長を表敬訪問した。

開拓の者と云われるのを嫌った時代、開拓の者と云われる事を誇りに思える時代、50 年は人の心も変えました。これまでの 50 年は苦難から安定へと、これからの 50 年は安定から繁栄へと飛躍する時代であることを祈念して『開拓 50 年の歩み』を発刊します。

漣氏は、排除されることには抵抗するが、包摂されればそれで良しとは考えていない。引揚者であるという島の中では特異な出自であることを決して忘れず、土地へのこだわりが生まれた。そして、「引揚者二世」ではない子供の世代には土地は受け継がれても、引揚者や開拓者としての精神が受け継がれていかないことへの葛藤が、『開拓 50 年の歩み』を発刊し後世に伝えようとする原動力になっていると考えられる。



写真 8 江川氏のアスパラガスのビニールハウス
(2012 年筆者撮影)

もう一方で漣氏は、2004 年には壱岐市議会議員も勤め「壱岐市」誕生に尽力した。また、JA 壱岐市アスパラガス部会が、第 41 回日本農業賞集団組織の部⁵⁾で最高位となる大賞に輝いた。これは、漣氏夫妻らがあきらめなかった壱岐のハウス栽培によるアスパラガスが 2012 年、長崎県を代表する野菜として全国に認められたということである（写真 8）。

日本の農業に打撃を与えると懸念されてもいる TPP についても、漣氏は弱気ではなく戦略的にその時に即応した農業のリーダーとして自信をもって語った。漣氏はいつまでも開拓者精神をもち続け、自分の農業や人生に誇りをもっている。既存の地域住民と同化せず、漣氏の不屈の開拓者精神はとどまるところを知らない。やはり漣氏がいつまでも「他者」としてのまなざしをもち続け、壱岐の島民として埋没しないで突出した存在でいるからであろう。それは漣氏の心には決して消えない朝鮮、不二農村のふるさとを失った記憶があるからではないかと考える。

6 「沈黙の壁」

引揚者のライフヒストリーの聞き取りをしていくと、彼らの多くが、これまでの人生の中で、自分たちのライフヒストリーを子供や孫や職場の人にほとんど語っていないことがわかる。漣氏の場合まさにそのケースである。不二農村の開拓や引揚げや壱岐での開拓について語ろうにも、子息は聞く耳をもたないという。このような状態について引揚者と周囲の人々との間に、「沈黙の壁」があると表現することができるだろう。有末賢は「沈黙の壁」について次のように指摘している。

5) 日本農業賞とは、全国農業協同組合中央会（JA 全中）、都道府県農協中央会（JA 都道府県中央会）と日本放送協会（NHK）の主催により、農業経営や技術の改革と発展に意欲的にとりくんでいる農業者と営農集団を表彰しているもの。1971 年から、年 1 回開催されている。

性的虐待やレイプの被害などが最も「沈黙の壁」が高いものであろうが、それ以外でも、同性愛としてのカミングアウト、病気や障害の「告白」、ある種の「嗜癖」や「共依存」の状態、そしてアダルト・チルドレンなど、いずれにしても「沈黙の壁」が存在している。その「沈黙の壁」の構造は、対象者本人が「語らない」というだけではなくて、周囲がむしろ「語らせない」という社会的・文化的装置が働いている。(有末 2012)

ところで、ここで注目されるのは「沈黙の壁」と引揚者同郷会との関係である。漣氏ら不二農村からの引揚者たちは、生活が安定すると、同郷会や同窓会⁶⁾を開催するようになった。この同窓会の成り立ちは以下のようなものである。

不二農村は、原則として出身県ごとに十戸で一つの村にまとめられ、それぞれの村には出身県の名前がつけられていた。各村人は、同じ県から、故郷には戻らない覚悟で、海を越えてはるばる入植し、ともに耕し、ともに収穫の喜びをわかちあった仲間である。各戸は、家族構成もほぼ同じで、子供同士も同じ不二小学校に通い、いわば親戚のような親密な関係であった。引揚げも村単位にまとまって行われ、引揚げ後も連絡先を知らせあい、転居しても各村出身者の間では音信が途絶えることはなかった。遠く離れても、友達付き合いは続いていた。不二小学校の卒業生は卒業時の名簿を持っていて、連絡を取り合い同窓会を開くようになった。

今から20年ほど前に、北九州市の三上敦氏が定年退職を機に、不二小学校在学中だった自分たちの同窓会の幹事を買って出た。三上氏は不二農村近郊の新観里の商店の三男であったが、不二小学校に通っていて、引揚げ時は6年生だった。不二小学校在学中に引揚げた人びとの現住所を知る者は、三上氏に知らせることになった。

不二農村には九州出身者が多かったので、引揚げ後も九州に住んでいる人びとが多く、九州では昔を懐かしみ不二農村の出身者が集うことが多かった。三上氏がまとめ役となり、不二小学校在学中に引揚げた人が九州に集まって、卒業生のように同窓会を開くようになった。不二小学校は1学年50～60名で、高等科まで入れると約400名が、不二小学校を卒業することなく引揚げたのである。三上氏は、その中から180名程度まで連絡先を把握した。学年を問わず不二小学校在学中に引揚げた人たちの同窓会が開かれ、20名程度が参加した。三上氏は現在の居住地ごとの名簿を作り、同窓会の後は手作りの会誌を発行した。同窓会で話していると、不二農村を一目見たいという希望者が多かったので、三上氏が現地ガイドなどを頼み、5年ごとにふるさと訪問を企画し、不二農村を訪ねたりすることもあった。初めてかつての不二小学校（現在は文昌小学校）を訪問したときは、卒業証書を発行してほしいと頼んでみたが、現在の小学校には、以前の日本人の在學生に関する資料が保存されていないので、無理だと断られたものの、かつての在校生たちは母校に帰れたと満足感にひたったそうである。

15人程度が集まって九州の各地を旅行することもあった。そのたびに「不二農村出身者で同窓

6) この同窓会は、群山市街の人たちがつくった月明会（藤井 2013）とはかなり違う。月明会の場合は、同期会、クラス会というような学校を中心とした同窓会の総体のようなもので、群山高等女学校、群山中学校（旧制）、群山小学校などの同窓会が合体しているのだが、不二農村の同郷会の場合は、学校のクラスや学年を中心にまとめた同窓会ではないという違いがある。これは、不二農村の子供たちの学校といえは、不二小学校が中心で、群山市街ほどには進学しなかったためだと考えられる。

会参加希望者の住所がわかる人は、三上さんに知らせること」と伝言した。そしてその同窓会の集まりの前には、三上氏が会誌を発行し、参加希望者に配布された。この会誌には、参加者名簿や自己紹介、感想やスナップ写真がのせられており「ぎんどろ同窓会⁷⁾」と名づけられた。結婚して離れ離れになった兄弟姉妹も、この会で集うことが多かった。

引揚げから開拓へというルーツを後の世代との「沈黙の壁」に阻まれた引揚者たちは、特定の個人に会いたいというよりは、同じ境遇の仲間と会うことで、引き継がれることのない過去の経験を共有することを目的にしているのだ。初対面の人たちでも別にかまわなかった。ふだんは、過去の記憶と断絶したところで生活している引揚者たちは、この場では沈黙を余技なくされてきた思い出に向き合うことが可能となり、日常では語れないことも存分に語りつくすことができたのだ。

ところで、「沈黙の壁」の向こう側にいる周囲の人々（子や職場の人）は、このことについてどう考えているのだろうか。筆者は、漣氏の長男に率直に尋ねてみた。長男は笑いながら次のように語った。

長年、同じ家で一緒に暮らしとって（父の引揚げや開拓時代の話）聞いたことなかです。（笑いながら）たしかに農業高校にいかず、跡を継がんでいたら今頃どんな人生やったろうかと思うてみることもありますけど。嫁さんもよう手伝ってくれますし、子供も4人もおってその子らが農業を継ぐと思います。家の舵取りが二人いると困りますけん、あんまり父と話せんのですよ。

現実の時間に追われる日々の中では、今とかけ離れた生活の記憶をあえて語るのは、無理があるのかもしれない。また、漣氏はそのことを腹立たしいとは感じていない。開拓した土地を手放さず、子息が農業の後継者となってただけで十分満足していた。筆者も含めた他人に語ることで、直接ではなくても、回りまわって子息に伝われば良いと考えている。

おわりに

以上、江川漣氏のライフヒストリーと『開拓50年のあゆみ』の分析を通して、引揚者の排除から包摂へという過程における、引揚者のアイデンティティのあり方を検討してきた。

引揚者は引揚げ後、生活の基盤を築くために戦後開拓の入植者として大変な苦勞をした。入植当初は経済的に恵まれず、その土地の特有の文化や方言が身についておらず、学校で「かいたくもん」とからかわれたり「あすこんもん」と蔑視された。しかし、引揚者は、行政の補助を受けながら、自分の選んだ場所でひたむきに努力し、地域社会に溶け込もうと真剣に取り組んだ。その結果、生活状態も向上し、地区対抗のスポーツ大会で優勝を続けるなど団結力を見せた結果、次第に社会的に包摂されるようになっていく。

7) ぎんどろは、不二農村の不二小学校の正門付近にあった樹木の名前。日本では東北地方でしか見られない。ぎんどろの木の下には土俵があり、懐かしく思いだす小学校の象徴でもあり、同窓会の会誌の名前につけた。花粉や落葉が公害となり切り倒され、現在はこの小学校（現、文昌小学校）に残っていない。

引揚者は、差別されることには抵抗したが、引揚げというルーツが世代交代とともに忘却されていくことに対しても抵抗していることが窺えた。しかし、引揚者たちは、引揚げに関する忘れられない記憶を子供や孫、周囲の人に語らないことがほとんどである。このような状況については引揚者とその周囲に「沈黙の壁」が存在すると考えられる。

「沈黙の壁」に阻まれて過去をめぐる記憶を共有することができないため、引揚者はそこからの開放をもとめ同郷会に参加し、引揚げ以前の記憶を存分に語り合い記憶を共有することを試みている。

この調査の今後の課題としては、壱岐の引揚者の事例だけではなく、他の地域の引揚者の事例をあわせて検討し、引揚者が排除され、その後どのように包摂されていったかを明らかにすることがあげられる。これに関しては、壱岐と並行して茨城県の戦後開拓の事例も聞き取りを行い現地調査済みであり別稿にまとめることにする。なお、全羅北道群山からの引揚者は開拓者だけではなく、植民地でさまざまな職業に従事していた都市部の住人もいたわけで、彼らも引揚げ後、同郷会を結成している。「群山月明会」という同郷会の参与観察を通じ、多くのライフヒストリーの聞き取りを蓄積してきた。それらの分析から引揚者の引揚げ後の生活世界が見えてきた。引揚者が外地で築きあげた生活基盤を突然なくし、沈黙考を続けながら生きる証を懸命に求めた創意工夫の人生を明らかにしようと考えている。

謝辞

本研究の調査は、2012年度関西学院大学先端社会研究所リサーチコンペに採択された研究計画に対する助成によって実施した。江川漣氏をはじめ、関係各位に深く感謝する。

参考文献

- 有末 賢 2012 『生活史宣言－ライフヒストリーの社会学－』 慶応義塾大学出版会。
- 倉石一郎 2009 『包摂と排除の教育学－戦後日本社会とマイノリティへの視座－』 生活書院。
- 岡部義朗 2000 「祝辞」『開拓 50 年のあゆみ』 国分開拓記念碑建設委員会（私家版）。
- 国分開拓記念碑建設委員会編 2000 『開拓 50 年のあゆみ』 国分開拓記念碑建設委員会（私家版）。
- 島村恭則 2013 「引揚者が生みだした社会空間と文化」『引揚者の戦後』 島村恭則編、新曜社。
- 島村恭則編 2013 『引揚者の戦後』 島村恭則編、新曜社。
- 武田 恒 1998 『土と遊ぶ－開拓者の記録－』（私家版）。
- 轟 博志 2005 「朝鮮における日本人農業移民－不二農村の事例を中心として－」『立命館言語文化研究』 17（1）。
- 長嶋 誠 2000 「祝辞」『開拓 50 年のあゆみ』 国分開拓記念碑建設委員会編、国分開拓記念碑建設委員会（私家版）。
- 永田喜代子 2000 「回想」『開拓 50 年のあゆみ』 国分開拓記念碑建設委員会編、国分開拓記念碑建設委員会（私家版）。
- 西村善明 2000 「温故知新」『開拓 50 年のあゆみ』 国分開拓記念碑建設委員会編、国分開拓記念碑建設委員会（私家版）。
- 藤井和子 2013 「朝鮮群山引揚者と月明会」『引揚者の戦後』 島村恭則編、新曜社。
- 森武磨編 2013 『神奈川大学大学院歴史民俗調査報告』 第 16 集（戦後開拓－長野県下伊那郡増野原－オーラルヒストリーからのアプローチ）、神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科。